Chapter 5: **ダークネス・ロード覚醒 パート4**

雨の午後、ゲッコウガは旧友であるコーチのエースバーンとアーチャースナイパーのジュナイパーと共に、リザードンの経営する「ブッチャー・グリル・レストラン」の奥のブースに集まっていた。ランチタイムの喧騒から離れた静かな場所だ。

ゲッコウガは古びた巻物を取り出し、テーブルの上に広げた。  
太字でこう書かれている――  
「指名手配：ダークライ ― 極めて危険」  
その下には、不気味な笑みを浮かべた影のような姿が睨み返していた。

エースバーンは皮をむいたニンジンをかじりながら目を細めた。

｜「ダークライ、か。やっぱり戻ってきやがったな。あいつは腐ってる。」  
｜メニューをちらりと見て小声でつぶやく。「信じられないよ… まだこんなもん食ってんのか… 僕はヴィーガンだぞ？」

一方、ジュナイパーは焼いたメェークルの串をつついていたが、ポスターの顔を見た瞬間、咀嚼を止め、目を見開いた。

｜「そ、その顔…」口ごもりながら肉をナプキンに吐き出した。  
｜「アーチェリー地区大会の時、殺されかけたんだ… 試合中に背後から忍び寄ってきて… カイリキーが偶然ジョギングで突っ込んでこなければ、今頃僕はこの世にいなかった…」

リザードンは厨房でケンタロスのリブに味付けしていたが、その会話を耳にしてサングラスを下げながら振り返った。

｜「今…ダークライって言ったか？」

ゲッコウガは黙ってうなずき、ポスターの一枚をテーブルの上に滑らせた。

リザードンはそれを手に取り、顔をじっくり見てから、低くうなった。

｜「何枚か置いてけ。もしここに足を踏み入れたら、次はアイツを焼いてやる。」

ゲッコウガは少しだけ口元を緩めた。

｜「焼き加減には気をつけろよ。アイツ、噛み応えあるぜ。」

—

その頃、グレイシアの屋敷の裏庭では、雨のあとで空気が清らかだった。リーフィアは伸びすぎたミントを剪定しており、アブソルは少し小さめの麦わら帽子をかぶって、ツツジの球根を植え直していた。

そこへ、シャワーズが尾を濡らしたまま駆け込んできた。

｜「気をつけて、」低い声で言った。「ダークライが戻ってきた。何か…大きなことを企んでる。」

グレイシアはティーグラスを静かに置いた。

｜「ダークライ？ ここに？ こんなにも経ってから…？」

アブソルの耳がピクリと動いた。彼はゆっくり立ち上がり、爪についた泥を拭った。

｜「…やっぱりな。」彼はつぶやいた。「最近、空気が変だと思ってた。」

二人は驚いて彼を見た。

｜「知り合いだったの？」とグレイシア。

アブソルはうなずき、視線をそらした。

｜「昔の話だ。俺は当時、金がなくて…絶望してた。ダークライが“レックウザ再興マシン”っていう、十倍儲かる投資話を持ちかけてきてな… 嘘だった。全部失った。仕事も、誇りも…巣穴までも。」

リーフィアは眉をひそめながら、そっとアブソルの肩に手を置いた。

｜「無理に話さなくても…」

｜「いや、大丈夫だ。」アブソルがさえぎった。「あの失敗は俺の責任だ。ただ…本当にアイツが戻ってきたなら、一言も信じるな。」

そのころ、少し離れた凍ったスナックワゴンのそばで、ピカチュウがイーブイの子どもにアイスバーを渡していた。クーラーの中身を補充しているふりをしながら、その話をほとんど聞いていた。

彼はため息をつき、ベリーバーにかじりついた。

｜「またその話かよ… 俺のサーカスでもねぇし、俺のレックウザでもねぇし…」

だが、視線は庭から離れなかった。気になって仕方がなかった。

—

その頃、街の中心では、ふわふわした影が濡れた通りを駆け抜けていた。ブースの持ち主ではなさそうな大きな傘を抱えたブースターだった。尾はびしょ濡れだったが、前足はしっかりと柄を握っていた。

彼はエーフィとブラッキーの住むタウンハウスの裏口から飛び込んだ。水しぶきが毛から飛び散った。

｜「母さん！父さん！ ダークライが…戻ってきた！」

ソファで紅茶を飲んでいたエーフィの手が止まり、ティーカップが音を立ててソーサーに触れた。目は虚ろに前を見つめ… あの檻… あの冷たい沈黙を思い出していた。

ブラッキーはすぐに立ち上がり、彼女の肩に腕を回した。  
ブースターは急いで傘を下ろし、入口のそばで雫を垂らした。

｜「シャワーズとマフォクシーが言ってたんだ。アイツ、何か企んでるって。」

ブラッキーは厳しい表情でうなずいた。

｜「なら、待ってる場合じゃない。備えよう。」

彼はそっとエーフィの額に口づけをした。

｜「病院の警備を固める。」

—

1時間後、ブラッキーは自らのクリニックに戻っていた。カビゴンとラグラージが正門に立ち、動かぬ石のように構えた。ピクシーはクリップボードを手に、ナースステーションでこっそりと監視用の隠しルーンを起動した。

そのころ、エーフィは図書館で援軍を召集していた。優しくも屈強なヌメルゴンは希少書籍エリアを守り、ブリガロンはまるで古の騎士のように正面玄関に立った。ジュラルドンは無言のまま、アトリウムにある魔力フィールドスキャナーを監視していた。

かつて平和だったこの街は、今や静かではなかった。  
…街は思い出していたのだ。